

並木幼稚園だより

【建学の精神】
感性の豊かな「日本の心」を
持った真の国際人の育成

令和5年度 11月号
学校法人志賀学園並木幼稚園
発行者：園長 渡部栄城

「春・夏・秋・冬」は、1年間の季節である。今でもそうであるが、私としては、それぞれの季節の長さは1年間の四分の一ずつであってほしいと思っている。が、実際は、絶対そうではないと思っている。「秋」が一番短いと思っている。一番長くあってほしいと思っているのに。そう思うのは私だけでしょうか？ さて、その秋の真ただ中の10月は、いろいろありました。写真と共にお伝えいたします。



さくら組さんが、おかいものごっこをしました。おすしやさん、らーめんやさん、ジュースやさんなど、おいしそうな食べ物、飲み物が盛りだくさんで、思わず食べてしまうところでした。飲んでしまうところでした。

10月は運動にもってこの日が続き、連日、「ぼくらはふくしまキッズマン」、「たけのこ体操」「エビカニ体操」など、様々な体操をしました。どの体操もテンポが速くリズムカルで、かなりの運動量です。大人にはちょっぴりきついです。子どもたちは大喜びです。



収穫の秋です。さくら組さんは、春に植えたサツマイモの苗が育ち、食べごろになったので、サツマイモ掘りをしてきました。サツマイモは、土の中にしっかり根付き、掘るのには、かなり苦労しましたが、全部掘ることができました。

さくら組さんは、「那須どうぶつ王国」に行って来ました。足元をリスが通ったり、カメが歩いていたり、虎が、ガラス越しではありましたが目の前に来たり、驚き、感動の連続でした。お昼の美味しいおにぎりにも感動していましたことを申し添えさせていただきます。





交通安全教室を行いました。最初に全園児を対象に、市のセーフコミュニティ課交通防犯係の先生方とケロップから信号機の見方と横断歩道の渡り方を教えていただきました。次にさくら組さんは、実際に近くの道路と横断歩道を歩きました。

無料の出張講座がありました。ねらいは「子どもたちに最新のEV車を見て、環境問題やエネルギーに負荷の少ないテクノロジーの進化を感じてほしい」ということでした。車は、米国テスラ社のEV車でした。去年まで、あの大谷翔平さんが乗っていたということでした。



段ボールの筒の半分で作った道路にどんぐりをころがして遊んでいます。超低予算で作った玩具に多くの子どもが熱中していました。見ているだけでも、楽しめました。完全球体でないどんぐりの形はころがるとき独特の軌道を表現します。

紙コップと松ぼっくりと糸で、けん玉をつくったようです。これもまた、超低予算です。結構難しそうでした。それにしても実りの秋、収穫の秋。食べるだけでなく、遊ぶのにも適した季節であることを実感しています。



ばら組さんの園外保育の様子です。園バスで、開成山公園に行って来ました。前半はたくさんの遊具でいっぱい遊び、後半はどんぐり拾いをしました。どんぐりは、最初は見つからなく諦めかけはじめましたが、いっぱいあるところにたどり着きました！

全員、思う存分、いっぱいとれてよかったです！ 楽しかったです！

ちょっと面白くためになるコラムがあったので紹介します。

全日本私立幼稚園連合会出版『私幼時報 VOL.462』からです。この冊子は、多くの幼稚園が、購入している冊子です。月1回の発行です。

誰のためのがまん？

東京大学大学院 教育学研究科 教授 針生悦子

マシュマロテストをご存じでしょうか。検査者は、幼児の前にマシュマロを一つ置き、次のように言います。「これから私（検査者）は別の部屋で仕事をしてこなくてはならないの。その間にこのマシュマロが食べたくになったら、ベルを鳴らして私を呼んでね。そうして私が戻ってきたら、このマシュマロを食べていいですよ。でもね、もし私が戻ってくるまでベルを鳴らさずに待っていることができたら、マシュマロはもう一つ、つまり合わせて二つあげますよ」こうしてマシュマロとともに部屋に残された幼児は、検査者が戻ってくるまで待ってられるのか、それとも、待ちきれずにベルを鳴らしてしまうのか。それを見れば、子どもの「がまんして待てる力」がわかるというわけです。

その後、このテストの開発者であるミシェル博士が、テストを幼児期に受けた人たちを追跡したところ、幼児期にマシュマロテストで待つことができた子どもたちは、そのあとも学校ではより良い成績をあげ、社会に出たあともほかの人とよりうまくやっていました。どうやら子ども時代の「がまんして待てる力」は、その後の人生の成功につながっているようです。

そのころ、別の研究グループは、幼児期に教育的介入を受けた子どもたちのその後を追跡して、人生の成功を導くのは、IQ（知能）ではなく、それ以外の何かであることに気づきました。もう少し詳しく述べますと、介入教育の対象となった貧困家庭の子どもたちは、幼児期に2年間プリスクールに通って手厚い教育を受け、親たちも週に一度の家庭訪問と月に一度のグループワークで子育てについて指導を受けました。こうしてすぐに子どもたちのIQは上がったのですが、その効果は長続きしませんでした。いったん上がった子どもたちのIQは、この教育的介入が終わって数年もすると、そのような介入を受けなかった子どもたちと変わらないレベルにまで下がってしまったのです。

もっとも、この子どもたちをさらに追跡していくと、幼児期に介入を受けた子どもたちは介入を受けなかった子どもたちにくらべて、高校を卒業する率が高く、犯罪をおかして逮捕される率も低く、40代になったときの収入や持ち家率も高くなっていました。IQの効果はあっという間に消えてしまったわけですから、これらの成功を導いたのはIQではありません。おそらく、介入教育の中で育まれた“IQ以外の何か”が効いているのですが、その“IQ以外の何か”とはいったい何なのでしょう？ となっていたところで、マシュマロテストの知見は、「がまんして待てる力」がその有力な候補であることを教えてくれました。

それにしても、マシュマロテストの話、「子どもはそんなにマシュマロが好きなのか!？」と考えてモヤモヤした方はいらっしゃらなかったでしょうか。実は「マシュマロテスト」というのは比較的最近になって付けられたあだ名です。実際のテストでは、子どもはまず何種類ものお菓子の中から自分が一番好きなものを選び、それがごほうびとして使われました。つまり、このテストが測定していたのは、ただ「がまんして待てる力」ではなく、「自分が選んだ目標のためにがまんして待てる力」だったのです。がまんだけの人生はきつとつまりません。がまんは、自分が心から実現したいと思える目標とセットになって初めて私たちの人生を豊かにしてくれるのです。子どもたちががまんについて学ぶのもそのような場面であってほしいと思います。

さて、上の記事が、ちょっと面白くためになったでしょうか？ ちょっと面白くためにならなかったとしても、上の記事をきっかけに、何かといろいろと考えるきっかけになったとしたら幸いです。

例えば、「すなおな心」、「思いやりの心」は・・・。